

あかしまん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

常滑・青海 瑞雲殿
誠意と真心であんしんのかげはし
CSK葬祭
TEL 0120-33-5909
TEL 0569-35-2785
FAX 0569-35-2296
24時間
体制完備

葬儀専用ホール

世界一の道化
岩田さんは、1970年、神奈川県横浜
浜市生まれ。父・高一さん(78)は、か

「バレエが好きで好きでしかたない」
心で、ボリシヨイの厳しい練習に耐えて
きた。
一昨年11月、ロシア政府から「日露の
文化交流に多大な貢献をした」として、「友
好勲章」を授与された。式典では、メドベ
ージェフ大統領から直接、勲章を授与され
た。岩田さんの活躍を、バレエ大団ロシ
アが認めたことになる。
伝説的スターでボリシヨイの芸術監督
も努めたワシリーエフさんは、岩田さん
をこう評価している。「モリのような素晴
らしいダンサーが踊っていることは、ボ
リシヨイ劇場にとって大きな幸福だ。ボ
リシヨイ劇場で、モリが活躍しているこ
とは、日本が誇るべきことだ」



村上信夫
(アナウンサー)

つて東京バレエ団で活躍
していた。
バレエを始めたのは9
歳から。父のバレエ・ス
クールで習い始めた。し
だいに頭角を表し、17歳
で、全日本バレエ・コン
クルのジュニア部門1

元気でいてくれることばたち

(157)

弱みは最大の強みになる

～バレエダンサー 岩田守弘さん～

ころだ。ロシア人でもボリシヨイに入る
ためには、子どもの頃から、バレエ学校
に通い、選りすぐられた人だけが入団を
許される。国はよいダンサーを育てるた
めに、生活費や教育費を出している。
バレエは国の威信をかけた芸術なのだ。
200年あまりの歴史があり、歴代の芸
術監督や様々なダンサー、そして客の思

位となり、90年、19歳で、旧ソビエトの
モスクワへ旅立った。
91年、ロシア・バレエ団に入団。93年、
モスクワ国際バレエ・コンクールで金賞
を受賞し、ロシアでやっていく自信が出
来て、バレエ団で出会ったオリガさんと
結婚した。マリヤさん(16歳)とありさ
さん(13歳)という2人の娘も授かった。
ロシア・バレエ団は、海外公演が多く、
過密スケジュールの旅ばかりで、なか
か家族と一緒にいられない。出来るだけ
モスクワにいたいと思ひ、ボリシヨイ・
バレエ団への入団を希望した。
しかし、すんなりとはいかなかった。
当時、ボリシヨイは外国人を採用しなかつ
たので、当初は、研修生という資格で入つ
た。正式入団してからも、ボリシヨイで
認められるまでが長く辛かった。ボリシヨ
イ・バレエ団というのは、格式の高いと



俳画/イネ・セイミ

い(エネルギー)が、劇場に蓄積されて
いる。その様な伝統と格式のある所ゆえ
に、そう簡単に招き入れてくれるわけが
ない。下積み生活が長かった。なかなか
役がもらえない。踊りたくても踊れない
状況が続いた。ひたすら練習を繰り返し
た。「いいときは成長しない。悪いときに
成長する」そう確信しながら...
ようやくボリシヨイデビューの日が
やってきた。余りにも役がこないのに、役
最大の強みになる」

村上信夫プロフィール
NHKエグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。
明治学院大学卒業後、
1977年、NHK入局。
富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。
現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ
第一-8:30~11:50)
これまで、『おはよう日本』『ニュース7』
『育児カレンダー』などを担当。
教育や育児に関する問題に関心を持ち
続け、横浜市で父親たちの社会活動グル
ープ『おやじの腕まくり』を結成。
趣味は、将棋。
著書に『元気でいてくれることばたち!』(近
代文芸社)
『おやじの腕まくり』(JULA出版局)『いの
ちの対話(共著)』(集英社)『いのちと
ユーモア(共著)』(集英社)

を下さい」と直訴したら、「猿」の役なら
あるといわれた。妻にはやめたほうが
いいと言われたが、動物園に行つて、猿を
観察して臨んだ。「生き生きとした猿」と
評判になった。
その役がきっかけで認められ、役が
くようになった。父にも「世界一の道化
になれ」と励まされた。

弱みを強みに変えた
岩田さんは、ボリシヨイで準主役クラ
スの第1ソリストという立場を獲得した。
岩田さんの踊る役は、キャラクターダン
スを中心だ。感情を動作で表現し、音楽
を踊りによって視覚化する。難しいがや
りがいのあるポジションだ。単なる脇役
ではない。自分の役柄や、存在を深く考
えさせられる。振付師の仕事にも役立つ。

イネ・セイミプロフィール
フルート奏者として活躍中。俳画家。
絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師
事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師
事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさ
しいタッチで描いている。個展多数

俳画教室開講中
常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時～三時
会費 一回、二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

大人でも上達する!
おとなのフルート教室
入会受付中!!
何が始まるかと
思っている貴女、
数年後、素敵に
フルートを奏でる姿が
そこにあります。
楽しく個人レッスン
致します。

講師 **イネ・セイミ**
(フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン1時間5,000円(テキスト代別)
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimine@oasis.ocn.ne.jp

ラジオが好き!
村上信夫
好評発売中

40を過ぎ、体力気力の限界と闘ってき
た。50歳までは現役で踊りたいと思つて
いたが、第一線を退くことを決めた。自
分を育ててくれたボリシヨイを退団し、
振付師に専念する。そして日本とロシア
の懸け橋になろうと意識している。

求められる。ドラマティック・バレエと
いわれるゆえんだ。
演者は、型通りに踊るだけでなく、本
気で演技も出来なければならぬ。岩
田さんが演じるマキューシオという役
は、ジュリエットの兄に殺される。死を
きつかけに、ロミオの一族とジュリエッ
トの一族の対立が激化する。だから、死
は、重要な場面だ。観客の気持ちを引き
付ける死ぬ時の踊りが見せ場だ。岩田さ
んは「跳躍や回転」だけでなく、目の演
技で、死を表す。目の光が、徐々に失せ
ていくというリアルな死を演じる。客席
から見ている、わかるかわからないか微
妙なところにも腐心する。そこに岩田さ
んの真骨頂がある。

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』就職

—自分ドラマつくろう— (8) 岡田 清治

日本のゆくえ
「素直でないといいますが、何を考えているのかわかりませ

前島は先ほどまでは打って変わって深刻な顔をのぞかせた。
ママは二人のカウンターにメバルの煮付けを皿に盛りつけ

「うまそうだな」
前島はすぐに箸をつけた。
「善さん、これいけますよ」

「いただきます」
真三は前島の掛け声で煮付けを口に運んだ。
二人はしばらく食べることに集中するためか、寡黙になった。

ママはBG機器にスイッチを入れた。沖繩民謡『安里屋ユン
タ』が流れた。
意外と、店の雰囲気は合う。

前島は民謡が終わるのを待って、再び話を続けた。
「私の女房が下の子のPTAの役員をされていて、進学や
部活、さらに就職や親の介護の話をきてきて家に帰っては話
すのです」

「お子さんは中学生ですか」
「そうです。下の子が中学三年で、上の子はまさに善さんの姪
御さんと同じ大学三年です」

「そうですか」
「女房が聞いてきた話を紹介しますと…」
前島はまず、大学三年男、高校二年女、中学三年男の子ども
を持つ主婦の話を取り上げた。

「大学生はもうすぐ就職活動が始まるのに、いまだにどんな
仕事をしたいかが決まらず、成り行きで決めていきそう。親と
しては、やはり安定した会社、大企業をと思ってしまい、口う
るさくなります。でも、やはり一生、働いていく仕事なので、自
分が好きなことを仕事にしてほしいとも思う」

「これが普通の家庭の親の気持ちだと思えますね」
「そうですね。仕事を深く考えないというか、考えられないも
のです。親とか親類の人の職業を垣間見る程度ですから、自
分に合っている仕事を広く見られないのも事実ですね」

「大学の学部で一定の方向性が出ていますが、それも思うよ
うにいかないのが現実社会です。こういう学生は与えられた
職業に一生懸命に取り組みば道は自ずから拓けていくと思
いますね」

「髪を茶髪に染めて、ヤンキー族やブタウタロウになって親の
脛をかじるパラサイトシングルになると、経済的にも世間的
にも困るんです」

「高校の娘は、まだ二年生だと思ひ、のんびりしている。それ
でいて大学か短大へ行きたいと言う。理由は楽しそうだから
と言うだけで、上の学校へ行つて、何かを身につけてくれるな
ら賛成するけど、理由がいま一つわからない。何になりたくい
聞いても、まだわからないと言うだけだから、どう接したらいい
のかわかりません」

「大学や短大を見ていると、楽しそうに見えるのも事実です
ね。親から授業料や下宿代を出してもらって、適当にアルパ
イトをしながらキャンパスライフ楽しむ気分はわかります
ね」

「一見、無駄なようにも友人を得ることも、恩師との出会いも
期待できます。またアルバイトを通じて社会勉強することも
あるでしょう」

「ただ、クラブやバーで働いている女の子が、ファッションの
ように大学に行っているケースも見受けれます。主客転倒もは

なはだしいわけで、学問はファッションではないのです。苦
学生だから仕方がなく、そうする場合なら理解はできますが
…」

「私も水商売をしていて時々、何のために大学へ行くのかと
疑問に思うこともあります」

「ママもなまなくように話そう」
「中学三年男の子は高校受験性、この子だけはやりたいこと
が、大まかな段階がある。スポーツに力を入れている高校へ



アルゼンチン・ブエノスアイレスの牧場(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を
左記のFAXかメールでお寄せください。テーマは
「就職」「日本のゆくえ」についてです。物語が進行す
る中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX: 0569-34-7971
メール: takamisus@akashinbun.net



プロフィール
著者・岡田清治(おかたせいじ)
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクション・NET
108代表) 著書に『夢 軌跡と
野望』百年とこれから
『あなたは社員の全能力を
引き出せますか!』
『リヨンで見た虹』など多数

行き、将来はスポーツ関係の仕事を望んでいる。
「スポーツはいいですね」
「私もある社会人サッカーチームを運営するNPOの顧問
をやっています。サッカーが好きなのは一生、それを続け
たいのです。食べるために昼間は働き、退社後、仲間と集
まって練習します。シーズンは月二回ほどのリーグ戦があ
るほか、地域の子どもたちにサッカーを教えています」

「人生はサッカーなんですか」
「こういう子どもはある意味、幸せですが、それでも一番の
悩みは生活力です。将来、プロの選手を夢見ても、挫折する
人がほとんどです。相当な選手でもアフターサッカーライ
フはかなり深刻です」

「スポーツでも芸術、あるいは技術でも一生継続することは
至難なことですね」
「この方は三人の子どもを抱えて頭が痛いようです」

「上の子を大学へ行かせた分、下の子にタメとは言えない。今
の就職難の時期に、何もやることを決めなくて就職先は決ま
るのだろうか。何社受けても、不合格もあると聞くと、高望み
しなくとも、思ったりするほど、子も親も悩みます」

「こうなつたのも自業自得と言ってしまうのは、何の意味もな
いわけです。私は自分がそうだったように勉強もせず、成績
も悪いまま社会に出ました。それでも中小規模のファミリ
ーに入りましたが、今日のように急成長するかどうか、わかり
ませんでしたが、がむしやりに働きました。働いた分が評価
され、生き甲斐を感じてきました」

「そんなんですね。一番大事なことは人間として信用できる
か、どうかだと思います。信用力がつけば、未来は開け夢
を持つことができます」

「ただ、みんなが就職できれば、社会は安定するのですが…」
「そうですね。中高年になつての再就職の道はきついです」
「それでいいですね」

ママが店の戸棚から古い日記帳のようなものを取り出してき
た。
「私の父は小さな梅林で梅づくりをしていましたが、生活費
は株式の運用益がほとんどです。なまじっか借家や株式を
所有していたので梅づくりには熱が入らず、一日中、ラジオ
にかじりついて株式相場やニュースに耳を傾けていました。
このノートに書かれた所有銘柄を見ますと、随分、手広く
やっていたことがわかります。父の死後、大半は長男に譲渡
しています」

「そうだったのですか。ママの家は資産家だったんだね」
「このノートに自分の生き方を示すような引用文がたどた
どしい字で綴られています」

「ほお、見せてください」
「川端に牛と馬とがつかわれて、牛と馬が風に吹かるる
青春は失策、壮年は苦闘、老年は悔恨」

子どもが女を最高目的と主張することはある広告的ス
ローガンの意味がある
滑らすなら舌より足を
口は災いのもと
言は剣より人を刺す
骨なき舌が骨を砕く
足を滑らせても口を滑らすな
口の中は自分でも口の外は他人
口を閉じて目を開けよ

(ボ・ヴォワール、デイズレリー、二茶)

「すごいですね」
「ママもこういう父親のもとで育てられたから、しつかり
されているのですね」
「全然、私なんか…」

「信用とは、そうして醸成されるのかも知れませんが」
「ところで、前島さん、他にも奥さんから聞かれています
か」

「そうですね。長男が大学四年生で、就職を身近に感じら
れている主婦の方も同じような内容です」
「長男は大学四年で就活中ですが、やりたいことがあつて、
授業には行っていないので、今だに方向性はゼロです。
目標があり、やりたいことができる企業に入ったとい
うのであれば、本人も力を発揮し、がんばっていきけるので中
小企業でもいいと思います。でも親としてはやはり世間に
知られた企業で、収入の安定を求めますので、ついつい口
を出してしまいます。学生の就職意識より親の意識改革が
必要だと聞きますが、耳が痛いです」

「大方の母親の気持ちでしょう。大企業へ安定という図
式です。それもテレビCMで知っている企業が母親の抱
く大企業のようなです」

「行政も大学も父兄に向けて就職ガイダンスをすべきで
すね」
「先ほどの日記帳の最後に、天命に生きる」とありますが、
そういうことでしょうか」

「それは現実には就活しようとする子どもを抱える親には
理解してほしいと思つても無理でしょうな」
「現実的な対応を求めておられるのでしょうか」

「前島さん、他にも何か」
「はい。就職の意味を知つてほしい主婦の方ですが…」

「我が家の長女は四大卒で教員免許を取り、小学校の先生
になれたのに、毎日「はあ、はあ、はあ」と、溜息ばかり。筋
ト列するようにいっぱい仕事を抱えて午前様に帰宅し、そ
の上、土日も学校に行き、家のことどころか、自分のことも
できない。年頃の女の子にこちらが溜息です」

「そんなに大変なら、早く結婚退職したら?と言つても、
彼氏をつくる時間があると思う?と聞き返されました。
男も女も何がやりたいか、何を求めて生きていくのか興味
があります」

「そこで就職の基準ラインつて、どうやって引くの?かも、
今を生きている若者に聞いてみたいですね。私自身が就職に失
敗して、フリーターになり、さつさと結婚してやりたいこ
とを、ずーっと続けてきた。世の中にバカバカ流され満足
と幸せを感じている母親なので、就職つて何?と強く思っ
ています」

「なるほどね。就職しても悩みは尽きないものですね」
「そうですね。人生は苦と楽の繰り返しです。苦は若
い時に買つてもむしろという教えがあります。いつまで
も苦も楽も続かない。苦があればいつか、楽が必ず訪れ
ると言えますよな」

「これには人生の大半を済ましてきた我々三人は納得で
すな」
「他に高校の先生の話も聞いています」

「焼酎を作つてから聞きました」
「ママは黒霧島の一升瓶から二人のグラスに芋焼酎を四分
の目安で注ぎ、そしてお湯をグラス一杯まで足した。」

(つづく)

ほりお教授の紀行文学シリーズ ロマンチック沖繩旅物語(連載第七回)

ヤマネさま、早く!

堀尾 幸平

ぼくは、沖縄本島の取材活動を終えた後、二三日の予定で沖繩離島のプライベートルームを気ままに楽しみたいと思っていた。

その日、那覇港でこれから西表島のイロオモテヤマネコに会いに行くという中学生吉田海里と偶然出合って、それから少年と行動を共にすることになった。

西表島に着き、ヤマネコの交通事故現場を見た後、民宿南風見に入った。

ひとまず荷物を置き、ヤマネコの探検は、夕方まで待たなければならなかった。

ヤマネコは暗くなつてからでないと姿を現わさないからである。

「おじさん、出かけますよ」

日没少し前に、少年にリードされる海沿いの山道を少年は、黙ったまま、どんと歩いていく。

少年がこの山道を通るのは、初めてのはずなのに、少しもためらわずに、先にごんごん進んでいく。日没後あたりの風景も次第に暗くなったが、小高い山道に出ると、闇の切れ目のように少し明るくなった。

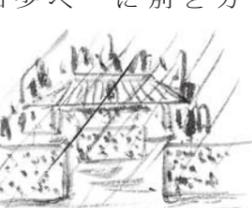
その時、鳥の音が聞こえた。

「ピーウ、ピーウ、ピーウ、ピーウ……」

繁茂した樹上を見上げたが鳥の影は見えない。

「これは、カラムリワシという鳥で、特別天然記念物になっています」

「どこで調べたのか、海里少年の豊富な知識に驚いた。」



「にぎやかな、さわやかな、いい感じの鳴き声だね」

「西表島では、ヤマダンと呼ばれて親しまれている鳥です」

それから、少年は口笛で、鳴き声のまねをした。

「ピーウ、ピーウ、ピーウ、ピーウ……」

「海里くんは、鳥の物まねもできるんだ。うまい、美にうまい!」

「ぼくがほめると、少年は得意になって更に何度もつづけた。やはり、まだ子どもである。」

しばらくして、こんどは、本物のカラムリワシが鳴き出した。

「二羽で鳴いているらしい。」

「やはり、本ものには、かないません。あれは、オスとメスにちがひありません。カラムリワシは、西表島と石垣島にだけ生息する特殊鳥類です」

せめて姿を見たいと思ひ、濃く茂った樹上を見上げたが、やはり何も見当たらない。

「ヤマダンの声が次第に遠くなり、山道が少し広くなつたと思つたら峠だつた。」

折から十三夜の明るい光の中に沖繩らしい海が浮びあがった。

右側が東シナ海。白い波が砂浜の境界を際立たせ、左側は、遠く森林がいつい

ている。

峠の坂道を一気に下りて海辺の砂浜に出ると、ぼくたちは両手を広げて深呼吸をした。さわやかな涼しい潮風が快くおつた。

やがて、海里は、岩場を見つけると、持ってきた組立て椅子を二つ並べた。そして、リュックからスルメを取り出した。ぼくたちは無言で食べた。

「おじさん、お金持ちなんですね」

「どうして?」

「だって、大人が仕事もしないで、こうして何日も旅行できる身分なんて、うらやましいですよ。おじさん、なに屋さん?何の仕事をしてるんですか?」

「本業は大学の教授とも言いかねて黙つていて、少年はぼくの顔をじろじろとながめながら言った。」

「ぼく、人相占いもできるんですよ。おじさんの仕事をあててみましょうか」

「へー。じゃあ、占つてもらおうか」

少年は急に目をきつめてぼくを凝視した。

「『センセイ』で、もう少し細かく言ううと、高等学校の先生かな」

「ぼくは、少年の勘のよさに驚いて、笑つた。」

「ああ、よかった。おじさんが学校のセンセイで」

「先生は、うるさくて、こわくて、イヤだろ?」

「そんなことありませんよ。ぼく、センセイが好きなんです」

「お世辞を言う必要はないんだよ」

「お世辞ではありません。ぼく、本当に先生が大好きで、心から尊敬しているのです」

「どうして好きなの?」

「第一に親切で熱心で、それに、ものごとを深く考える大人だからです」

海里は、心から尊敬しているらしい表情でぼくに向かって改めて頭を下げた。中学生らしいかわいらしい仕草だつた。

「先生、スルメは少し残しておいて下さいよ。ヤマネコさまのおみやげですから」

少年のあまりの用意周到さに感心した。「ヤマネコ」の一番の好物は、やはりスルメ?」

「いや、何でも食べますよ。ネズミ、コウモリ、昆虫(へび)、水鳥から魚まで。ヤマネコは、海や陸や森の中のもの何でも食べます。食べられるものは何でも獲物としてとらんで、獲物が見つからない時は、砂浜で貝まで掘って食べるんです」

海里の声は次第に熱っぽく大きくなっていった。

「ぼくは、海里の博学に改めて感心した。特に開かなかつたが、少年は図鑑を手離さず持つてきている。十三夜の月の明りがあるというものの、本が読めるほどの明るさではない。」

「センセイ、懐中電灯を点けちゃ、だめですよ。ヤマネコさまが、怖がつて出て来なくなりますから」

先に少年の方からクギをさされてしまった。

「それから、少し長い間、ぼくたちは無言のままひたすら、ヤマネコの気配をうかがつた。」

「何だか魚釣りの感じだね」

潮騒と森のざわめきが単調なリズムをいつまでも奏でていた。時々遠くから鳥の鳴き声も聞こえた。

「ぼくは、函を開いて、真剣な顔でひたすら、ヤマネコを待つている少年の姿を月光の中に眺めながら、何だか彫刻のように美しいと思つた。」

吉田海里は、愛知県の常滑の出身で、幼い頃、両親の離婚によって現在、宮崎県のM養

育院で、孤児としての生活を送っている。

「ぼくには、お好み焼屋のおばあちゃんがいるから、幸せだと思つています。それに、いま、片思いだけど、ヤマネコさまもいますから」

海里は、自分自身に言い聞かせるように、はつきりと言つた。

「海里くん、今夜は、もうダメじゃないか」

「センセイあせつちやダメですよ。何ごとも根気よく、じつくり待つことが大切であります」

海里は、落ちついて、笑つている。美にしっかりとした中学生である。

それから、二時間ぐらいつつたが、やはりヤマネコが現れる気配はなかつた。

「先生が言うように、今夜はやはり、ヤマネコさまは、寝坊をして、いるかも知れませんが、帰りますよ」

「ぼくたちはひどく残念な思いで月夜の砂浜をゆつくりと歩いて帰つた。」

と、その途中で「あつ」と海里が叫んだ。

波打ち際に大きなへびが死んでいて。海里は、しゃがんでへびの死体を手でつかんだ。頭部が何かに食いちぎられてらしく、実際は「メートルくらい」の大きさのへびかと思われた。

「センセイ、これは、ヤマネコさまの仕業にちがひありません」

海里は、へびをつかんで、ぼくの目の前に突き出した。

「先生、こを注意深く見て下さい。ほら、へびの腹が食いちぎられて、ですよ。この歯の跡。まちがひなくヤマネコさまの歯です」

「ぼくは、へびは好きではないが、体の真ん中で食いちぎるなんて残酷だなあ」

「仕方ありませんよ。弱肉強食という自然の掟です。ヤマネコさまだけが悪いのではありません」

海里は注意深く丹念にへびを観察している。

「ヤエヤマヒバアらしいです。ナミへび科で、八重山諸島に生息する無毒へび。カエルなどを捕まえて食べているのです」

「このへびの半分を持ち帰って後で調べることにしようか」

海里は、声を立てて笑つた。

「こんな食べ残しを持つて帰つても、意味ありませんよ。捨てちゃいましょう!」

「そう言うが早いのか、海里は、へびを振り回して、力いっぱい海原の遠くへ投げ放つた。砲丸投げの選手のように手馴れた動作だつた。」

「海里くん、このへびのおかげで、この渚にヤマネコが確実に現れた証拠がつかめたのだから、大収穫つてわけだね」

「さすが、センセイ。その通りです。明日の晩、またここに来ましょう」

「ヤマネコが現れる確率が高いつてわけだね」

「ぼくたちは、急に、またうれしく、元気がなつて真夜中の浜辺を半ばはしりぎながら帰路つた。」

次の日は、朝から雨だつた。海里は、あまり眠つていないにもかかわらず、そわそわと窓の外ばかりを見ていた。

「宮沢賢治の雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズの心境ですね」

海里は、いたたまらなく待ちつづけたが、風雨は止まず、出発したのは、結局、昨夜と同じように、暗くなつてからだつた。

「ぼくたちは、無言のまま、昨夜のへびの死がいを見つけた海岸に直行した。海も海岸もすべてが暗く、昨夜と変わつていなくなつた。ぼくたちは、雨音を着て、ずいぶん長い時間様子を見たが、風雨は、少しも弱まらなかつた。」

海里の方がなぜか弱音を吐きはじめた。「こんな雨じゃ、ヤマネコさまもひびつて出てきませんね」

「そんなことはないと思うよ。天候とヤマネコの行動とは直接関係はないと思うな。自然の中で生きていく動物たちは、腹が空いて飢餓状態になれば、どんな悪天候にも関係なく獲物を求めて、危険な場所にも出向いて来ると思うが」

「先生の理論は分かりませんが、でも、この風雨では、やはり無理ですよ。今夜は帰りましょう」

中学生の考えは、まだ甘い、と思つたが、それは言わなかつた。

「じゃあ、帰ろうか」

「ぼくたちも、あきらめて、仕方なく闇の奥の潮鳴りを聞きながらかなり悔しい思いで宿に帰つた。体を拭いて、床についたのは、まだ十一時前だつた。ぼくは、年が若いもなく興奮してなかなか寝つかなかった。」

ヤマネコは、食べ物に飢えて、強い風雨などに関係なく、海岸にさまよい出て来るにちがひないのだ。

「ぼくは隣で、無心に眠っている海里を起さないように、そとを床を抜けた。そしてまた雨具で身を固めて、暗い闇の中に飛び出した。」

相変わらずの強い風雨で傘などさせる状況ではない。全身ずぶ濡れで、先ほどのへびの海岸を目にした。

と、あの場所、ぼくは見たのである。けふる雨の波打ち際に、魚を食べているヤマネコらしい姿があつた!

間違ひなく図鑑や写真を見た、あのイロオモテヤマネコである。

「ヤマネコさま、お願いします。お頼みます」

「ぼくは、何を頼むのか、頼むの自分でも分からないまま、何度も心の奥でつづやきながら、一歩、歩慎重にヤマネコに近づいて行った。」

ヤマネコは親子二匹らしかつた。近づくと、親子の背中に乗つていた赤ん坊ネコがぼくを見つめた。

「ミヤア」

赤ん坊は、ぼくを見て人なつこい表情で鳴いた。甘えて笑つていような顔であつた。ぼくも、ごく自然にまねて「ミヤア」と応じた。

「ミヤア」

また赤ん坊が甘えて鳴いた。少し大きな声であつた。

「ミヤア」

その時、目が覚めた。夢であつた。あまり夢を見る習慣のないぼくが、何年ぶりに見た夢であつた。ぼくは全身汗びつぽりになつた。

「センセイ、寝言、うさぎ、うさぎ、眠られませんか。静かに寝ていて下さいよ」

「ごめん、ごめん」

「ヤマネコさまの夢を見てたでしょ?」

ドキンとしたが、少年に笑われると思つてぼくは夢のことは黙つて目を閉じた。

だが、ぼくは激しい興奮で、どうしても朝まで眠れなかつた。

「筆者紹介」

ほりお・こうへい。作家、「日本学術出版」代表。名古屋大学研究室修了。元愛知淑徳大学文学部教授。著書多数。現住所、名古屋市南区元桜田町四一五五。

カット 牧 富世

111025 chitaroman279_05.indd 4
プロセスシアンプロセスマゼンタプロセスイエロープロセスブラック

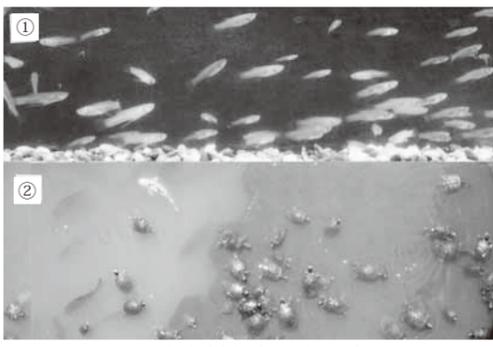
11/11/02 8:54

知多の動植物雑記(二七八)

原 穰

十一月に入り、立冬も間近おー寒さむーの毎日になるのはイヤだけど、振り返れば春から秋にかけての川の生物調査も無事終了。

私の特集である淡水魚類図鑑には掲載されていないので、暫く考えていたが、ふと思いついた「ちたろまん」を開けば、七年前の第一九七号に明記されていて感動！



こんな川もあるんです

写真①は半島北端部の三面張りの川で、川中は七、八尺。流れる水の深さは十センチほど。水は澄んでいて、けれど、真夏の八月十三日、長靴の足もボカボカ。こんなところで、住めないよなと思いつつながら...

上流へ向かえば、川の隅にコンクリートがはがれてできた三十センチの水溜りに小さな魚が泳ぐ。「何これ？」とすくみ取り、器に入れて確認すればカダヤシの群れ。さすが汚濁にも高塩分にも強く、水温二十度以上ならいつでも産卵できるというコワイ魚。

町の考古学

武豊の収蔵品展 (百六十九) 奥川弘成

遺跡



復元された弥生時代の壺

武豊町歴史民俗資料館で現在、「武豊の古代・中世」と題して収蔵品展が開催されています。武豊町の古代は、原始時代の石鏃散布地を最古として、最も古い土器は...

あわせ、東海市平洲記念館館長の立杉彰氏にお願いをして、弥生時代中期の土器の中から、高さ33センチほどに推定される獅子懸式土器とよばれる壺を復元していただきます。それは、知多半島の壺ともいわれるほど、この時期の代表的な文様を施した土器です。

このほかに土製壺車2点など、これまでに知多半島で確認できた古墳の副葬品からみて量や質を見ないものでした。この副葬品をもたらし、豊かさの背景に伊勢湾、三河湾の各所にある壺作りがあります。今回展示では、町内の古代の壺つくりにかかわった古墳時代や奈良平安時代土器が...

古代の壺つくりが衰退すると、中世初期に茶碗や皿、壺を作った焼き物の生産が始まります。それは、武豊町にある南小松谷古窯、南蛇ヶ谷古窯、北小松谷古窯の出土品をはじめとして、いまもまた、武豊町から美浜町南部に掛けて、知多半島の中で最も中世の窯跡が密集した地域があります。その代表的な中田池古窯群では、知多半島で唯一の年号を記した陶硯が出土しています。今回の展示会では同時に出土した壺や壺などとともに公開をしています。

今回は展示できなかった集落跡のウスガイト遺跡を含め、知多半島の古代から中世の指標となる重要な遺跡がこの武豊町には、多くあります。

ちよつとおじやまします

流木工房 海泉倶楽部 まつもと よしひささん 全く想像しなかつた。季節は秋だというのに、私の前に現われた まつもとさんはハワイアンだ。アロハシャツに短パン、万年草履といったスタイルだ。「僕のステイタス」といわんばかりの主張だ。このスタイルを仲間はどう見ていたのかと思いきや、なかなか好評

なだとか。誰にも似ていない存在感。わが道をゆくスタイルがカッコいいという人もいます。1年中、このハワイアン姿で過ごしているのかと、冬は寒いので長袖、長ズボンで過ごしているよ。まつもさんは知多半島の海で、瀬美半島の海で、神奈川県横須賀の海岸でガラス片や流木などの漂着物を拾い集めている。

てほしい。そして、美術館館長からは、「まつもとさんには、もうアートなものが作れるはずだから、アートの手をつけるプロジェクトに余計なあれはいらない。まつもさんの言葉に、まつもさんも自分の作品が人に与える影響の大きさに気づき、幸せな気持ちになれたという。でも、ひしひしと伝わるプレッシャーは強く感じているようだ。

まつもとさんの作品には、独自の遊び心とアートがある。ある日展開係者は、「まつもとさんの作品は自由で面白い。あなたの感性でアートになる。是非、この作品を作り続けたい」と話した。(赤井 伸彦)

若竹俳壇

- 園児皆引き上げし庭枯葉舞う 秋風に二の足ふらぬ外出着 被秋風の仮設住宅台風風 秋昔手の触れぬ程傍に寄り 後れ馳せ老の楽しみ大根餅 こんの里もこもこも甘味沙華 秋なれば熱き戦いドラゴンズ 秋晴に綻ぶ笑顔北海道 初秋刀魚酒の肴一番手 木屋や近頃猫ニヤン寝てばかり 大漁旗なびく港や鯛雲 散水のホース飛行機雲に向け オレ流なおとほけの弁秋の風 走り蕎麦列車一本遅らせて 登り窺巡れば椿実をこぼす 予報士の誰より早く赤い羽根 おだやかな夕日返して新松子 秋鳥をすばいり包んで台風裡 秋光の球根ごり植木市 月光の名も無き草に降りそそぎ 秋晴や飛行機雲の筋高し 彼岸花肩寄せ合えり寺の道 満月や我が影細く付いて来る 露草の花を愛で行く散歩道 可愛らし離れて一輪彼岸花 彼岸花三つ日見ぬ間に咲きそらふ 酔きたる低き土塀やこぼれ萩 酔芙蓉一日花のいとおしき

